

# 現代日本語における境界直後の「だ」について

鄧 瑾瑄（京都大学大学院生）

## 要旨

現代日本語共通語では、判定詞「だ」が、発話冒頭（「だよね」）、文節末（「お店にだなあ、人がだなあ…」）、「なんて」を伴って名詞以外の品詞後（「9月に雪が降るだなんて」）などの、談話・発話構造上の境界の直後に出現できる。本発表は、100人以上の日本語母語話者を対象とした自然さ調査、及び『日本語日常会話コーパス』の実例に対する考察を通して、これらの境界直後の「だ」の実体を明らかにするものである。境界直後の「だ」は、通常の文末の「だ」として発せられることで、境界を越えて結束性を保つと同時に、文脈によって、話し手の発話時点の判断を明示する機能、あるいは話し手の発話時点の判断でない命題を構成する機能を発動し、先行発話をそれぞれ話し手の発話時点の判断、話し手の発話時点の判断でない命題として認定する\*。

キーワード：「だ」、境界、発話冒頭、文節、「だなんて」

## 1 はじめに

現代日本語共通語では、判定詞「だ」が、(1)のように、発話冒頭に現れうる<sup>1</sup>。

(1) 「あの人って、話、長くない？」と訊かれて

だよね。

(定延 2019: 11)

「だ」は、(2)のように、文節末にも出現しうる。

(2) お店にだなあ、人がだなあ、いっばいだなあ、入ってだなあ… (定延 2019: 105)

さらに、「だ」が (3)のように、「なんて」を伴って名詞以外の品詞に続くこともある<sup>2</sup>。

(3) 9月に雪が降るだなんて、見たことない。

以上の例は、「だ」が談話・発話構造上の境界の直後に出現するという点で共通している。(1)では、「だ」が発話冒頭という談話構造上の大きな境界の直後に出現している。(2)と(3)の場合、「だ」は、名詞以外の品詞に後続する点で、発話構造上の境界の直後に出現すると考えられる。

\* 本発表は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2110 の支援を受けたものである。

<sup>1</sup> 本発表における「だ」は、「だ」の終止形を指す。境界直後の「だ」に適宜、下線を引く。

<sup>2</sup> 以下、出所が明記されていない例文は全て発表者による作例である。

本発表では、境界直後の「だ」が、文脈によって、話し手の発話時点の判断を明示する機能、あるいは話し手の発話時点の判断でない命題を構成する機能を持つと主張する<sup>3</sup>。境界直後の「だ」のこれらの機能は、文末に出現する「だ」の用法に基づいている。話し手は境界の直後に、通常の文末のように「だ」を発することによって、境界を越えて結束性を保つと同時に、先行発話を話し手の発話時点の判断、あるいは話し手の発話時点の判断でない命題として認定すると考えられる。

次節から、境界直後の「だ」の位置付けを明らかにした上で、発話冒頭の「だ」、文節末の「だ」、及び、「なんて」を伴って名詞以外の品詞に続く「だ」を考察する。

## 2 境界直後の「だ」の位置付け

田野村 (1990) は、判断の有無によって、同じ構造を持つ名詞述語文を以下のように二分した。

- (4) a. (アノ風体カラスルト) あの男はヤクザだ。  
b. (君ハシラナイダロウガ) あの男はヤクザだ。 (田野村 1990: 785)

田野村 (1990: 785) は (4a) について、「話者はいままさに判断—この場合、推量的判断—をくださった、もしくは、くだしつつあると言える」、(4b) について、「話者が知識として持っている情報が表明されているにすぎない。発話の時点において判断がくだされるわけではない」と述べている。

「だ」は境界直後に、(4a)、(4b) のような文末の「だ」として発せられることで、話し手の発話時点の判断を明示する機能、話し手の発話時点の判断でない命題を構成する機能を発動し、先行発話をそれぞれ話し手の発話時点の判断、話し手の発話時点の判断でない命題として認定する。

## 3 発話冒頭の「だ」

ここでは、3.1 節及び 3.2 節で、それぞれ「だと思う」と「だと思ふ」以外の「だ」で始まる発話を中心に、発話冒頭の「だ」の持つ 2 種類の機能を観察する。

### 3.1 「だと思う」

「だ」で始まる発話「だと思う」で特に注目すべきは、多くの場合、発話冒頭の「だ」がなくても、発話「と思う」が依然として自然である点である。例えば、次の (5) を見られたい。

- (5) (友人にひっかけクイズを出したら、案の定、ひっかかって、おかしい答えを出してきた。それを訂正する発話として)  
a. と思ったら大間違い。  
b. だと思ったら大間違い。

<sup>3</sup> 本発表での「明示する」ことは、日常語とは異なり、必ずしも意図的ではないものとする。

ウェブページを介したアンケートで、(5a)、(5b) の自然さを調査したところ、以下の図1、図2に示す結果を得た。この調査は、20代から70代以上までの日本語母語話者104人に（性別・出身地域を問わない）、自然さを1点～5点の5段階（1点：とても不自然～5点：とても自然）で問うものであった。図の横軸と縦軸はそれぞれ点数、人数である。

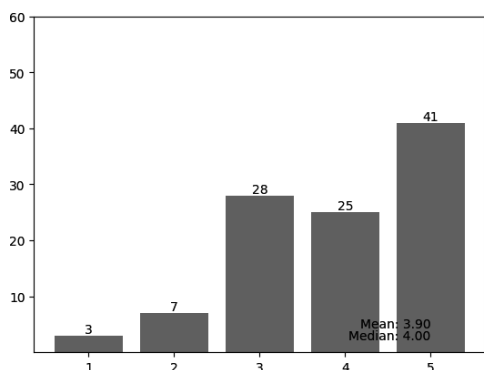


図1: (5a) 「と思ったら大間違い」の自然さ

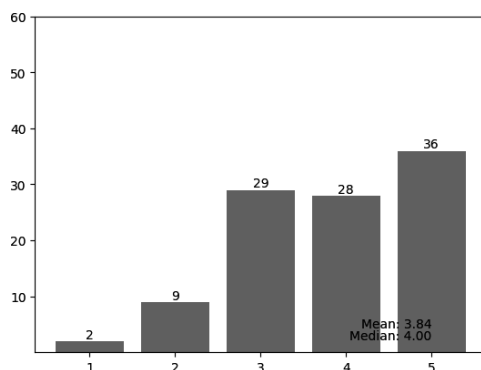


図2: (5b) 「だと思ったら大間違い」の自然さ

図1、図2は、(5a) と (5b) が総じて自然であることを示している。5%の有意水準でウィルコクソンの符号順位検定 (Wilcoxon signed-rank sum test) を行った結果、(5a) と (5b) の自然さには統計的な有意差がない ( $p=0.44$ )。

(5) では、判断する認知活動を行う主体が聞き手（友人）であるため、発話冒頭の「だ」は話し手の発話時点の判断でない命題（聞き手の思考の内容）を構成する。また、(5) のように判断する主体が話し手でない場合、「思う」という動詞自体が判断を表すため、話し手の発話時点の判断でない命題を構成する「だ」がなくても、先行発話は「思う」により話し手の発話時点の判断でない命題として認定される。よって、「だ」の出現は任意である。

同様なことは、発話冒頭の「だ」が話し手の発話時点の判断を明示する例においても観察できる。例えば、次の『日本語日常会話コーパス』（以下 CEJC）の実例において、慎による発話冒頭の「だ」を削除しても、発話の自然さは大きく変わらないと思われる。

(6) (友人たちと、高齢者の運転免許証の自主返納について話している)

貞：だからねやっぱり事故起こす人しか免許持ってないんだよ。年寄りって。

慎：だと思いますね。

(CEJC: S002\_004)

(6) のように判断の主体が話し手の場合、「思う」という動詞自体が判断を表すため、話し手の発話時点の判断を明示する「だ」がなくても、先行発話は「思う」により話し手の発話時点の判断として認定される。(5) と同じように「だ」の出現が任意である。

しかし、話し手の発話時点の判断を明示する必要があると考えられる文脈において、先行発話が「思う」により話し手の発話時点の判断として認定されても、判断を明示する「だ」

がないと、発話は若干不自然になる<sup>4</sup>。例えば、次の (7) を見てみよう。

(7) (いつも約束の時間に遅れてくる友人と、待ち合わせをした。約束の時間になると、スマホの電話が鳴り、出るとその友人であった)

友人：ごめんごめん。ちょっと急用で、5分遅れるわ。

(それに返答する発話として)

a. ? と思ったよ。

b. だ と思ったよ。

(5) と同じアンケートで (7a)、(7b) の自然さを調査したところ、以下の図3、図4に示す結果を得た。

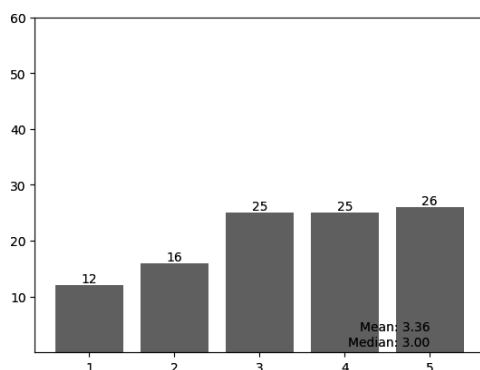


図3: (7a) 「と思ったよ」の自然さ

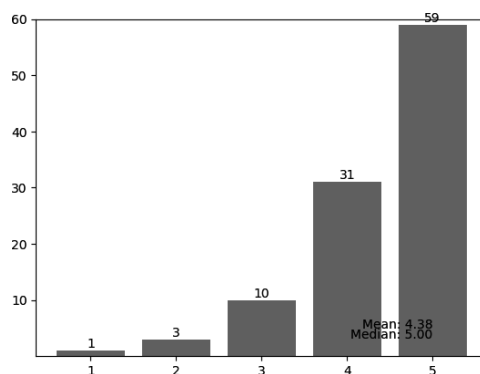


図4: (7b) 「だ と思ったよ」の自然さ

図3と図4からわかるように、(7a) 「と思ったよ」は自然さの中央値と平均値が共に低く、若干不自然と言える。その一方で、(7b) 「だ と思ったよ」は右肩上がりの分布を呈しており、非常に自然である。5%の有意水準でウィルコクソンの符号順位検定を行ったところ、(7a) と (7b) の間の自然さの差は統計的に有意であることがわかった ( $p=2.27e-10$ )。

発話冒頭の「だ」に関する先行研究 (奥津 2001, 劉 2010) は、発話冒頭の「だ」が述語あるいは言語的・非言語的文脈を代用する機能を持つと主張した。だが、「だ」を代用語と考えると、なぜ (6) は「だ」がなくても自然なのに、(7) は「だ」がないと若干不自然になるのかという問題には答えられない。

本発表の主張によって、この現象の説明が可能となる。(7) の文脈において、友人からの遅刻の連絡に対する返答発話「(だ) と思ったよ」が自然に聞こえるには、次の2つの必要条件を満たさなければならない。それは、友人から連絡がくる前の段階で、話し手がすでにそう (連絡内容のように) 判断していたことと、この過去の判断が現在の友人の連絡内容によって裏付けられることである。ただし、「友人から連絡がくる前の段階で、話し手

<sup>4</sup> 例文冒頭の単一の疑問符「?」は当該発話の若干の不自然さ、二重疑問符「??」は当該発話の不自然さを表す。以下も同様。

がすでにそう判断していたこと」にとって重要なのは、話し手が実際にそう判断していたかどうかではなく、聞き手にそう思わせることである。つまり、話し手は、連絡がくる前の段階で自分がすでにそう判断していたことを、現在の会話の場で明示する必要がある。話し手が (7b) で発話時点の判断を明示する発話冒頭の「だ」を発することによって、友人の連絡がくる前に行った判断を、発話時点でもう一度行ってみせている<sup>5</sup>。そのため、発話冒頭の「だ」のある (7b) が自然である一方、「だ」のない (7a) は若干不自然である。

### 3.2 「だと思う」以外の「だ」で始まる発話

先行研究と CEJC から収集した事例に基づき、発話冒頭の「だ」の2種類の機能に応じて、できるだけ網羅的に「だ」で始まる発話を表1のように整理した。

表1: 「だ」の機能による「だ」で始まる発話の分類

命題構成	だっけ、だと (いいね/いいな/いいけど)、 だと (さ) (伝聞)、だって (よ/さ) (伝聞)、 だそうだ、だし、だもんね/で/だから
判断明示	だね/な/よね/よな/わな/わね

以下、話し手の発話時点の判断でない命題を構成する「だ」で始まる発話から観察する<sup>6</sup>。

「だっけ」は先行発話を受け、過去を回想したり、記憶を確かめたりする際に発する発話である。そうであると判断をくだす段階にはまだ至っていないため、「だっけ」は先行発話を未確定の命題として認定する。ここで、発話冒頭の「だ」は、話し手の発話時点の判断でない命題を構成する<sup>7</sup>。

#### (8) (母と、おやつの価格について話している)

日野: カルビーとかコンビニ屋って百六十円ぐらい。今。

正和: だっけ。わかんない。正規の値段がわかんない。 (CEJC: C002\_004)

「だと (いいね/いいな/いいけど)」の場合、話し手の発話時点の判断でない命題を構成する発話冒頭の「だ」と条件表現「と」が組み合わせあって、先行発話を、話し手のこれから述べる後件の成立条件である命題として認定する。

<sup>5</sup> 田野村 (1990) も、(4a) について、「(a) を発すること自体が判断をくだすことに相当する」「その文を発すること自体が判断という精神の営みに即応する」「推量的判断という心的な営みとその文を発話する行為とが明確的に分離しがたい様相の中にある」と述べ、発話行為と認知活動の関連性を指摘している。

<sup>6</sup> 加藤 (2016: 97) は、形式文脈を、「同一セッションの内部で言語的に具体化される発話の連続的な蓄積からなる。原則として、セッション参加者が共有していなければならないものであり、命題の形で談話記憶に蓄積できる陳述性の記憶である」のように定義した。先行発話を話し手の発話時点の判断でない命題として認定する「だ」は、先行発話を命題の形にし、形式文脈として談話記憶に蓄積するという認知過程を言語的に反映していると考えられるだろう。

<sup>7</sup> 「。」は発話末尾、「[ ]」は重なった発話の開始を表す。意味のないカタカナは言いよどみである。

- (9) (友人たちと、父親に完全に縁を切られた知り合いの子供について話している)

岡崎：やっぱりちょっと男の子だからお父さんとちょっと繋がってほしいかな  
[ ってゆうのはちょっとあたしん中ではあんのね。

西： [ そうね。うーん。だといいね。ほんとに。 (CEJC: T017\_018)

話し手の発話時点の判断でない命題を構成する発話冒頭の「だ」に伝聞の表現が後続する「だと(さ)」、「だって(よ/さ)」、及び「だそうだ」は、先行発話を、伝聞情報からなる命題として認定する。

- (10) (いつも朝早くから出勤する田中さんの姿がないことに気づいた社員たちのもとに課長がやってきた。そして、課長が社員 A に向かって)

「田中さんは盲腸炎で緊急入院したそうです。今週はお休みということで」

(課長が座席に戻って行く。社員 A が自分の後に座る社員 B に)

だそうです。/だってさ。 (劉 2010: 93)

話し手の発話時点の判断でない命題を構成する発話冒頭の「だ」と事実を並べて示す接続助詞「し」が組み合わさる「だし」は、先行発話を客観的な事実に基づく命題として認定する。

- (11) (家族と、ある電気オーブンについて話している)

平沢：電気あの手前あの開けた時のもう熱の逃げ方が早すぎて [ なんかもう。

志麻子： [ だし。余熱を力か  
けるのにむちゃくちゃ時間かかるし。 (CEJC: K012\_004)

話し手の発話時点の判断でない命題を構成する発話冒頭の「だ」に原因や理由を表す助詞「もん(もの)」が続く「だもんね/で/だから」は、先行発話(以下の(12)の場合、先行する自分の発話「お兄さんがね具合悪い時いる」)を理由や原因を述べる命題として認定する。

- (12) (義理の娘(由美)と、病気のお兄さんのために、お兄さんの自宅まで訪問して本を渡したある人物について話している)

義母：近くまで来ましたってゆって来てくれてあのお兄さんがね具合悪い時いる。

由美：うんうん。

義母：だもんだからあの自宅まで来て僕の本ですって。 (CEJC: T003\_006)

発話冒頭の「だ」に同意や同感の終助詞が後続する「だね/な/よね/よな/わな/わね」の場合、話し手はまず「だ」によって発話時点の判断を明示して、そして聞き手に対し同意や同感を表示、または要求する。

(13) (友人と、就職活動について話している)

柚本：内定押さえときたいよなってゆうのが [ 実際のところ。

安藤： [ だよな。 (CEJC: T009\_005a)

(13) では、先行発話が会話相手の発話であるが、次の (14) では、話し手は先行する自分の発話を発話時点の判断として認定し、事後的に聞き手に対して同意を要求する。

(14) (先生が、学生たちと懇親会で)

溝口：だから苦瓜ったらこれなこれゴーヤってき日本語に普通にゆうと大和コト言葉でゆうと苦瓜ってゆうじゃん。

内山：[ うんうんうんうん。

田辺：[ あー。

溝口：だよな。 (CEJC: T013\_014a)

#### 4 文節末の「だ」

文節末に出現する「だ」の例として、ここでは (2) を再掲する。

(15) お店にだなあ、人がだなあ、いっぱいだなあ、入ってだなあ… (定延 2019: 105)

定延 (2019: 107) は、例えば、「人がだなあ」という文節の意味内容は、「私は「人が」と言いたいんだがなあ」とであると指摘した。その上で、「この発話は、「人が」という一般的なレベルの発話を、発話について語るメタ的なレベルから「だなあ」と語っており、「人が」と「だなあ」の間は深く区切れている」と述べた。このことから、文節末の「だ」は、話し手自身の発話に対して、「言いたいことはその通りである」というような話し手の発話時点の判断を明示する機能を持っていると考えられる。

#### 5 「なんて」を伴って名詞以外の品詞に続く「だ」

「なんて」を伴って名詞以外の品詞に続く「だ」は、話し手の発話時点の判断でない命題を構成する機能を持つと考えられる。例えば、次の (16) と (17) を見てみよう。

(16) (9月のある日、「札幌で初雪を観測」というニュース記事を読んで発する発話として)

a. 9月に雪が降るだなんて、見たことない。

b. 9月に雪が降るなんて、見たことない。

(17) (9月のある日、札幌で実際に雪が降っているのを見て発する発話として)

a. ??9月に雪が降るだなんて、見たことない。

b. 9月に雪が降るなんて、見たことない。

同じ発話 (16a) と (17a) が、(16) の文脈では自然である一方、(17) の文脈では不自然になる。ここで、「だ」が話し手の発話時点の判断でない命題を構成すると考えると、この

現象の説明が可能となる。

(16) の文脈では、ニュース記事による先行発話（「9月に雪が降る」）が話し手の発話時点の判断ではないため、「だ」が出現できる。その一方で、(17) では、話し手が目の前で実際に雪が降っているのを見ているため、先行発話を話し手の発話時点の判断でない命題として捉えられず、「だ」も出現できない。(17b) のように、「だ」を削除すれば、発話が自然になる。

また、次の (18) も見られたい。

- (18) (親しい関係にあった友人の告別式の前に、最後に友人の顔を拝見しながら、そばに  
いる知人に)
- a. あの人が亡くなっただなんて...
  - b. あの人が亡くなったなんて...

(18) のように、親しい関係にあった友人のお別れの儀で、亡くなった友人の顔を実際に見ているにも関わらず、先行発話の内容（友人が亡くなったこと）を心の中で認識しがたい、あるいは認識したくない、つまり、話し手の主観的現実を離れた命題として認識する場合、「だ」の出現も自然である。

## 参考文献

- 奥津敬一郎 (2001) 「接続のうなぎ文ーやっぱり述語代用説ー」『日本語教育』111: 2-15.
- 加藤重広 (2016) 「文脈の科学としての語用論ー演繹的文脈と線条性ー」『語用論研究』18: 78-101.
- 定延利之 (2019) 『文節の文法』. 東京: 大修館書店.
- 田野村忠温 (1990) 「文における判断をめぐって」崎山理・佐藤昭裕 (編) 『アジアの諸言語と一般言語学』785-795. 東京: 三省堂.
- 劉雅静 (2010) 「談話レベルから見た「だ」の意味機能ー「だ」の単独用法を中心にー」『言語学論叢 オンライン版』29(3): 90-107.